

世界へはばたく環境教育

中国黒龍江省朝鮮族第一中学校との国際交流

平成18年 8月
北海道標茶高等学校

はじめに

本校は、昭和21年に北海道庁立標茶農業学校として開校され、北海道標茶農業高等学校時代を経て、平成12年4月には道内3番目の総合学科として生まれ変わった。

地域の自然環境を学びながら、21世紀をたくましく生き、地域に貢献できる人間を育てることを大きな目標とし、本校独自の学校必修科目や実習、体験的諸活動を教育の中心に据えることで、標茶町の基幹産業である酪農業の理解や後継者の育成などに貢献している。

1 本校の目指す教育

標茶町は釧路湿原国立公園、阿寒国立公園、知床国立公園の3つの国立公園に囲まれ、中心部を釧路川がゆったりと流れる、北海道の大自然が実感できる酪農の町として発展している。

本校は255haという我が国有数の広大な校地面積を誇っており、校地内には牧草地や畑地などの学校農場のほか、野球場、サッカー場、陸上競技場、テニスコートを有している。また、校地内にある山(軍馬山)は、町民のレクリエーションの森として愛され、足を踏み入れるとアカゲラが木を啄む音がこだまし、タンチョウのつがい、エゾシカやキタキツネが姿を現すなど、豊かな自然を体感できる学校である。

生徒は、この貴重な学習フィールドを生かし、日頃から自然環境と人の暮らしとのかかわりを学んでいる。また、汚染や乾燥化の問題が指摘されている釧路湿原の環境破壊を食い止めようと平成14年より開始した「釧路湿原再生プロジェクト」の調査・研究は、平成15年から平成17年の間に、文部科学省や道教委から継続的に研究指定を受け、より信頼性や学術性の高いものに深化・発展している。教育課程では、平成18年度に学校設定教科「環境」を設置し、理数科目や農業科目の枠を飛び越え、教育活動全体を通じて環境教育を推進している。

2 青少年交流事業の概要

今回の交流は、北海道・黒龍江省友好提携20周年記念事業のひとつで、「ハルビン市・標茶町青少年交流事業」として7月23日から7月30日までの8日間の日程で行われた。

本事業は、北海道と黒龍江省との交流が始まって20年という節目の年を迎えることから、両地域の関係を一層前進、持続させるために、次世代を担う若い人材の交流を活性化させることを目的とした。

本校は、北海道のはからいにより、「釧路湿原再生プロジェクト」に取り組む生徒がこの事業の派遣団として黒龍江省を訪れ、中国でも関心が高まりつつある環境保護の課題をテーマに意見交換する機会を得ることになったものである。

3 初めての海外

参加生徒は3年生2名、2年生1名、1年生1名の計4名で、自分たちの環境保全の取組を知ってもらいたいという熱意を持った者が校内選考された。選抜生徒の中には、地域の基幹産業である酪農業を営んでいる家庭の子もおり、家畜糞尿処理の問題と常に向き合っている。

24日夕方、ハルビン市に到着した。夜には朝鮮族第一中学校副校長をはじめ、北海道職員、両校教員、両校生徒の出席のもと、歓迎夕食会が開かれた。夕食会は自己紹介から始まり各人がそれぞれ歌を披露するなど、終始なごやかなムードで交流に相応しい盛り上がりを見せた。

4 ハルビン市朝鮮族第一中学校

25日、ハルビン市朝鮮族第一中学校(中学校=日本の中高一貫校)において両校の取組や、学校活動を紹介する交流会がもたれた。

朝鮮族第一中学校は1947年ハルビン市朝鮮人民小学中学部として創立し、2005年から黒龍江省の重点中学校(重点校=学校教育全体の質的向上を図る上で中核的役割を担う学校)となっている。

現在、同校には中国人日本語教師が5名、日本人日本語教師が1名いるが、ハルビン市内の学校の中では日本語履修者が一番多い学校である。生徒は日本文化や習慣などに強い興味を示し、日本人との交流を望んでいる。夏休み期間ではあったが、今回の交流会には朝鮮族第一中学校から李錦仙副校長をはじめ、日本語教師、日本語選択生徒をあわせて約40名の参加があり、今回の交流に対する現地の関心の高さを感じさせた。

交流会は、同校の生徒による学校紹介、日本語の学習風景の説明等から始まったが、本校生徒はもちろん、北海道側出席者も彼らの日本語能力の高さに驚きを隠せなかった。また、日本語だけではなく、日本の文化も積極的に吸収しようという彼らの向学心とパワーに圧倒された。

続いて、本校生徒がPCのスライドショーを使って「釧路湿原再生プロジェクト」の取組を発表した。緊張をほぐすため、覚えただけの片言の中国語による挨拶、自己紹介から始めたが、こちらのたどたどしい言葉に終始、笑いとなごやかなムードの中で発表が始まった。釧路湿原の汚染の現状、水質浄化の方策についての提案、これまでの取組と成果など、発表内容がやや専門性が強い「現地の方に理解してもらえらるだろうか」「どのように分かりやすく伝えたらいいだろうか」などの不安があったが、身振り手振りを交えてのプレゼンテーションを行った。すると、生徒の環境保全に対する思いや理解してもらいたいという熱意が伝わり、大きな拍手の中で発表を終えることができた。朝鮮族第一中学校と標茶高等学校、双方の教育方法は異なるが、お互いの学問に対する努力を理解し、認め合うことでより深い交流会となった。

「釧路湿原再生プロジェクト」はこれまで数多くの発表の機会を得てきたが、海外での発表は今回が初めてであり、プロジェクトとして初の海外発信となった。

5 日本語弁論大会

26日午前、「北海道紹介展」オープニング・セレモニーの見学後、午後から黒龍江大学において開催された日本語弁論大会に、本校は審査員として参加した。

大会は大学生の部は10名、高校生の部は朝鮮族第一中学校の生徒2名を含めた6名が参加していた。大学生、高校生ともに弁士は流暢な日本語でテーマに沿った主張をし、どの発表も甲乙つけ難かった。発表内容は思わず笑ってしまうもの、感動させられるもの、中国との交流について深く考えさせられるものなど、真剣に聞き入ってしまうものばかりで、弁士の日本語能力の高さ、向学

心の高さをあらためて実感するものであった。朝鮮族第一中学校の生徒は惜しくも優勝を逃したが、本校生徒には同年代の学生の考え方を聞くことが刺激となり、国際的なものの考え方を身に付けるよい機会となった。

6 ザーロン国家級自然保護区

27日から28日にかけて、朝鮮族第一中学校、標茶高等学校の両校生徒と教員とでザーロン国家級自然保護区を視察した。現地に近いチチハル市までは列車で移動し、チチハル市からバスで30分程かけて現地まで移動した。

ザーロン国家級自然保護区は23万²を有する広大な湿地で、日本最大の面積を誇る釧路湿原の10倍以上の広さを持っている。湿原にはタンチョウの他、数種類の鶴を飼育、繁殖させており、観光資源のひとつとなっている。タンチョウは1日2回、決まった時間に放されるため、大空を舞う優雅な姿を見ることができる。

野生のタンチョウは警戒心が強く、標茶町周辺のタンチョウには容易に近づくことはできないが、ザーロン自然保護区では餌付けされているためか、触れられるほど近づくことができる。また、ラムサール条約に登録されて以来、釧路湿原には人が足を踏み入れることが難しくなったが、ザーロン自然保護区は観光用のモーターボートが走っていたり、観光客の捨てたゴミを見かけたり、湿原の中にトイレも設置されていた。同じラムサール条約登録湿地であるにもかかわらず、ザーロン自然保護区の湿地のあり方は、環境保全への取組を広めたいと考える生徒にとって、思いがけない、あるいは多少残念な、光景に映ったかも知れない。

ザーロン自然保護区の湿原の中には約1,000世帯が暮らしており、湿原植物のヨシの売買を生活の糧としている事実がある。ここは、環境保全の認識の違いだけでなく、人間と自然とがどう共存していくかというとても大きな問題を抱えているのだ。

7 環境教育は世界へ そして、これからの課題

「釧路湿原再生プロジェクト」の研究は、今回の発表により世界発信の第一歩を踏み出した。発表の見学を訪れていた黒龍江省環境保護局の方々から、「標茶高校の取組は高校生の研究レベルを超えた素晴らしいものである。」と、ありがたいコメントをいただいた。

しかし、生徒達は中国のどこまでも続く平原、優雅に流れる大河、広大な湿地を目の当たりにし、そのスケールの大きさとともに、自分たちに課せられた課題の途方もない大きさを思い知らされたことだろう。自分たちが大きなプロジェクトだと思っていた釧路湿原の再生計画は、世界の中ではほんの小さな環境問題でしかなく、全地球的規模の自然の営みにまで目を向けなければ、環境問題の真の解決はありえないということを実感したに違いない。

「環境教育とは何か？」という問いには数多くの答えがある。それは、例えば、環境問題に関する知識を増やすこと、地域の環境問題を解決しながら学ぶこと、自然のすばらしさを体験的に学んでいくことなど、挙げればきりが無い。ただ、一つ言えることは、自然環境を守ろうとする意識づくりを行い、そうした活動とともに貴重な自然環境をできるだけ損なわずに次世代に引き継いでいくことが、人類にとって急務だということである。

今回、北海道のはからいにより、黒龍江省の学生との交流で本校生徒が得たものは数知れず、彼らの人生観に少なからず影響を与えるものとなった。自分の考えを伝えることの難しさ、伝えられたときの喜びなどを知った彼らが、また一回り大きくなって、元気に、帰国したことからも、環境問題を介したこの国際交流は十分に成功を収めたと言える。

さいごに

本事業を推進くださった高橋はるみ 北海道知事とその計画、連絡、調整のため、本校に細かくご配慮くださった北海道知事政策部知事室国際課国際交流グループ 荒井孝子 主任に御礼申し上げたい。また、黒竜江省渡航にあたり、資金援助くださった北海道標茶高等学校教育振興会(今西 猛 顧問<標茶町長>、前島 仁 会長<本校PTA会長>) 何度もご来校くださり事前準備や心構えなどについてご指導、ご助言くださった田中 進 標茶町議会議員(本校同窓会副会長) 森山 豊 標茶町役場住民課長(本校PTA役員) 佐藤吉彦 企画財政課長に心から感謝を申し上げたい。

今後は、この交流によって新しく生まれた貴重な体験やネットワークを本校教育に効果的に活用していく必要がある。そして、生徒が後世にまで大切に残さなくてはならない自然環境と産業の開発・発展とのバランスについて学び、それぞれの考えを持って地域環境や地球環境の在り方を自らの言葉で述べ、実践に移すことができるよう、本校職員一丸となり教育のさらなる充実に邁進していきたいと考えている。